

●令和3年度、4年度所属委員会

厚生保健委員会、地方創生調査特別委員会

●令和3年度 調査研究事項(予定)

- ・公共施設の人工芝の管理について
- ・区の再編に伴う市民サービス提供について
- ・防災の森づくりについて
- ・これからの放課後児童会について
- ・生きづらいつ子の中学卒業後の進路について  
(3つの市民団体と一緒に調査研究する)
- ・ヤングケアラー支援についてなど

市民の声から  
ヤングケアラー

高校時代から大学2年生まで、ガン闘病の祖父と認知症の祖母を学校に通いながら、介護していた元ヤングケアラー(浜松在住)の方の話を1時間半ほど聞いた。

介護も大変だったけど、介護のために学校を早退

しようとする、「あなたがいて、なんの役にたつの」「嘘をつくならもっといい嘘つきなさい」と言われるなど、周りの理解がないこと、孤独なことが辛かった、そして当事者同士が話せ、受け止めてもらえる場が欲しかったと語った。

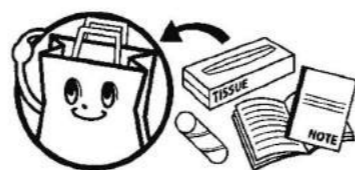
2018年に議会でヤングケアラーについて質問した。その後ヤングケアラーの理解が進んできたが、当事者が自分をケアラーだと気づいていない場合も多く、まだまだサポートが追いついていない現状だ。

<ヤングケアラーとは>

年齢や成長の度合いに見合わない重い責任や負担を負って、本来、大人が担うような障害や病気のある家族の介護や世話をすることで、自らの育ちや教育に影響を及ぼしている18歳未満の子ども。

<若者ケアラーとは>

18歳~30歳くらいのケアラー。進学や仕事、子育てとの両立に影響を及ぼしている。



この印刷物が不要になれば「雑がみ」として古紙回収へ

●浜松市政向上委員会 政務活動費 令和2年度決算

1、収入

項目	金額(円)	備考
政務活動費	1,800,000	150,000円×12ヶ月
預金利息	10	
合計	1,800,010	

2、支出

項目	金額(円)	備考
調査研究費	739,681	旅費、利用会員会費、調査委託費等
研修費	19,440	旅費、参加等
広聴費	29,024	旅費
要請・陳情活動費	622	旅費
資料購入費	27,160	書籍購入費
人件費	178,133	スタッフの人件費
事務所費	286,852	Web会議ライセンス、プリンター修理費、パソコンリース代、インターネット通信料、事務用品費など
合計	1280,912	

3、残高 519,098円(市に返還する)



浜松市政向上委員会  
レポート



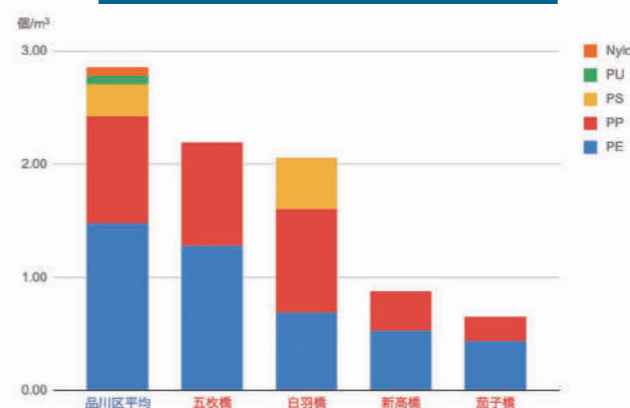
「人工芝」「ブルーシート」がマイクロプラスチックに。~馬込川調査から~

浜松市政向上委員会(代表 鈴木恵)は、2020年度の政務活動費を使い、世界共通の環境課題になっているプラスチックの海洋流出の実態を調べるため、2020年10月に馬込川流域4地点(白羽橋、茄子橋、五枚橋、新高橋)で採取し、馬込川のマイクロプラスチックの浮遊状況調査を実施した。



<馬込川五枚橋付近(東区)>

結果:2020年他地域調査との比較



各地点の個数密度(1㎡あたりのマイクロプラスチック等の個数)  
※品川区平均は東京都品川区3地点の結果(2020年9月の品川区議阿部議員の調査より)

マイクロプラスチックは、直径5mm以下と小さいプラスチックのことで、環境中の有害な化学物質を吸着する性質があり、誤って飲み込んだ鳥や魚、ウミガメなどへの影響が懸念される。さらには生態系や人間の健康への悪影響も懸念されている。その課題解決のためには、流出が懸念される製品、その流出量、そして流出経路を把握し、データに基づいた具体的な施策を打ち出すことが必要だ。

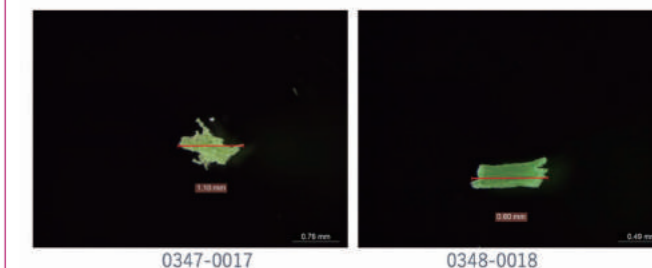
今回の調査に当たっては、浜松市環境政策課、NPO法人エコライフはままつ、浜松の海を守る会のご協力をいただき、採取したプラスチックを株式会社ピリカ(東京都)に、調査・分析・報告を依頼した。

調査前にはレジ袋やペットボトルの破片かと想像していたが、分析した結果は、「ブルーシート」「人工芝」が多かった。どちらも、屋外で使用され、紫外線やスパイクなどの擦れにより劣化し、小さい破片がそのまま排水溝、そして川に流れていた可能性が高い。

テニス場、サッカー場などのスポーツ広場で「人工芝」が使われている公共施設があり、今後はその利用状況、人工芝の現状を市と連携をして調べていき、排水溝に流れないようにするための方策などを考えていきたい。

プラスチックの使用削減、ポイ捨て削減他、海洋プラスチックを減らす方策を皆さんと一緒にこれからも考えていきます。

浜松市議会 浜松市政向上委員会 鈴木恵  
人工芝と推定されるプラスチック(PP)



編集・発行 浜松市政向上委員会 代表:鈴木恵

浜松市中区元城町103-2 浜松市議会内 TEL/053-457-2479  
MAIL/megu@megumi-happy.net FAX/053-457-2489

メールはこちらから▶



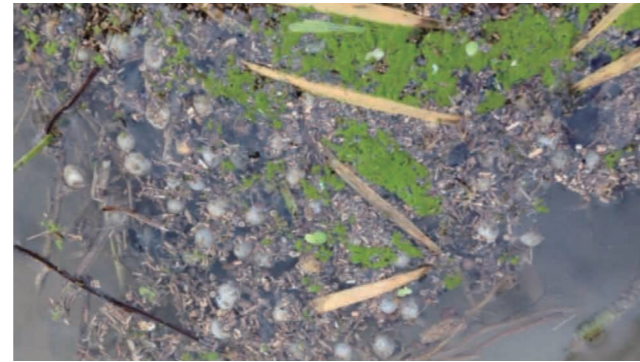
## こんなものもマイプラに! 「被膜肥料」

「NPO法人エコライフはままつ」が、2020年7月19日及び8月1日に篠原海岸で採取したマイクロプラスチック。一部元は何だったのかわからないものがあったため、株式会社ピリカ経由で調べてもらった。

一番多かったのが、稲作に使う「被膜肥料」(コーティング肥料)、次が発泡スチロールだった。枕の中に入っているピロー、洗濯バサミ、釣具、植木ポットなど細かくなった多くのマイクロプラスチックが見つかった。

「被膜肥料」とは、肥料成分をポリエチレンなどのプラスチックで被覆された肥料のことで、作物の生育にあわせて少しずつ中の肥料成分が溶け出すしくみになっている。化成肥料を直にまくと水に溶けて水田の外に流れ出てしまうため、環境汚染を防止し、暑い

季節の追肥の労力を削減することができ、高齢化する日本の農業従事者には最適な肥料と言われていて、水田の6割で使用されている。被膜肥料は、便利な一方、マイクロプラスチックの原因の一つとなっている。田んぼから、川や海に流れない方策が必要だ。



## ヘチマでマイクロプラスチックを減らさまいか!

明治~昭和40年ごろ、浜松がヘチマ(糸瓜)の生産、品質が世界一だったこと、ご存知ですか?

プラスチックのスポンジをヘチマのスポンジにすることで、マイクロプラスチックが少しでも減らすことができるのではないかと活動を始めている団体「浜松シードバンク・シードカフェ」がある。

子どもの頃ヘチマ畑がたくさんあったなと思い出し、ヘチマと浜松の歴史について中央図書館の郷土資料室で調べた。

「浜松から西鹿島までヘチマの棚をつたっていける」とまで言われたようで、栽培の中心は、笠井と浜北だった。ヘチマは、タワシだけでなく、帽子、帽子の芯、スリッパ、靴の中敷、機械油のフィルターなどに使われ、海外で重用されていた。ヘチマ、落花生、生姜、南蛮が遠州四品と言われ、海外輸出をし、外貨を稼いでいた。

明治32年には、パリの万博にヘチマなどを出品、好評を得、多くの国に、輸出されていた。それを後押ししたのが「織田利三郎」。パリの万博では、巨大の象の模型を作り、これにヘチマをはりつけて、展示した。

織田利三郎は、浜松で大規模の博覧会を開催したり、浜松町農会、静岡県生姜糸瓜蕃椒落花生同業組合などを設立したりと、地域の産業振興に尽力した。高町の奥山半僧坊浜松別院正福寺に建てられている塔には、織田の功績を称えて、正面に利三郎の肖像画がはめ込まれている。

現在の田町にあるカスミヤさんは織田が開いた店舗で、100年を越えて営業中。まだまだ知らない浜松。



## こんな動きが始まっています!

新たな紙容器のリサイクルが、日本製紙(株)、浜松グリーンウェーブ(株)、NPO法人エコライフはままつにより、始まっている。紙製のアイスクリームカップ、紙製ヨーグルトカップ、紙コップを浜松市西部清掃工場で回収し、日本製紙(株)で、段ボールに再生する。

歯ブラシのリサイクルも「えこはま」で始まっているよ。



できる  
ところから  
始めよう!

## 中学校の校則その後

2年前に浜松市内の校則(生活の決まり)を調査し、男女別の制服や、下着の色は白などの問題点について、議会で質問し、様々なメディアに取り上げられた。

その後、どのように変わったのか、変わっていないのか、再度情報公開請求制度を使って、市内の中学校48校を調べてみたところ、大幅に変わっていた。特に注目は、校則の改訂方法が明記された学校が出てきたこと。生徒たちの意見が反映される仕組みが出てきたことは嬉しい変化だ。(詳しいデータはありますので、具体的に知りたい人は言ってね)

### ●代表的な男女別制服の例



項目	令和元年	令和3年
制服の男女別がない学校	1校	36校
靴の色(白以外)	白・紺1校	3校(白・黒・紺1校、指定なし2校)
靴下の色	白のみ	9校(華美でないものや白・黒・紺)
髪型の男女別がない学校	16校	33校
下着の色	白などに規定1校	0校
黒タイツ&レギンスなどOK	1校	7校
校則の改定方法を記載	0校	8校
性への違和感への配慮記載	0校	2校
個別対応について記載追加	0校	7校

\*髪型や身なりについて、「中学生らしく」と記載がある学校は令和3年度26校あった。また、マスクの色を白と規定している学校は1校。



やっぱり  
浜松って  
いいね。

## 点字にまつわる4つのいいね!

- 1 日本語の点字を発明した、日本点字の父、石川倉次さんは、浜松市鹿谷出身(1859~1944年)
- 2 「点字大阪毎日新聞」の初代編集主筆、盲人の父、中村京太郎は、浜松市和地出身(1880~1964年)
- 3 世界初の点字投票実施は、浜松の市議会選挙から(1926年)
- 4 視覚障害者中心の事業所の先駆け、WITHが浜松で設立(1996年)

